

# 一流の教師たちを 集める

開校時の本校の教師陣を見てみよう。

修身 (校長) 鈴木卓苗

国漢地歴 鈴木勝二郎

英語 太田定康

体操武術 島軒十次郎

数学 太田達人

音楽 新藤 武

鈴木校長の経歴については後に述べるとしよう。鈴木勝二郎教頭は一関高等女学校校長、県立図書館長の経歴の持ち主であった。数学の太田達人は樺太中学校長も務めた教育界の大先輩であり、文豪・夏目漱石の長年の友人でもある。英語の太田定康は東京帝国大学を卒業したばかりの新進、体操武術の島軒十次郎は戸山学校で秩父宮・閑院宮両殿下の師範を奉仕した経歴の持ち主である。また正課に音楽をとりいれているのも当時の中学校では珍しいことだった。

義正翁が教師に求めたのは「師範道尊」で、学校の指導方針に沿わない者、みずから環境を改善しようとする意志のない者、こそこそ悪の種をまく者などは縁なき連中で、そんな教師は断るより他ないという一貫した態度であった。

同時に教育はどこまでも指導者の意欲の問題であるとの考えから、優れた教師を集め、発掘するのに労を惜しまなかった。たとえば、翁に発掘された教師のひとりに牟岐喆雄がいる。

牟岐は岩手師範学校を卒業後、仁王小学校の訓導となったが、義正翁に認められ、東京の二松学舎に学んだのち岩手中学校に着任、漢文を担当した。牟岐はその経緯と翁の思い出を「石校同窓会報」第二号(昭和三七年発行)に寄せている。やや長くなるが、一部抜粋して掲げる。

(前略)

私が翁にお会いしたのは岩手中学校に漢文の教師が必要だというので白羽の矢が私に向けられたときに始まります。仁王小学校の訓導であった私が当時岩中の教頭鈴木勝二郎先生に伴われて内丸のお宅にお邪魔したのは昭和三年の暮れも迫った一二月半ば、かねて噂は耳にして居ましたが初めてお目にかかる三田翁、それに翁とは亡言の友である富田小一郎先生も同席されて居りました。

「岩中の教師に来て欲しいがそのためには東京に行つて勉強してくれ。学費は岩手奨学会から……」

というお話でした。鈴木先生は私の将来を案じてか、「卒業するまで間違ひなく送金するといふ一札を……」と恐る恐る話されましたところ翁は頭上から一喝「俺が出すと言つたら出す。」



乙組主任  
牟岐喆雄



副主任  
島軒十次郎



教頭  
鈴木勝二郎

証文が何になる……」正に千金の重みでした。鈴木先生は当時県教育界の長老、私どもの大先輩でありますが、この頂門の一針に平身低頭、その非礼を詫びたことは言うまでもありません。私はそのとき三田翁はかなりきびしい人だと思いましたが、この印象は間もなく完全にほぐれましたが今でもその場の光景が強く胸に焼きついて「男子の一言……」などと柄にもなく胸を張りたい気持ちに駆られるときもあります。

こうした経緯から私の東京での生活が始まったのでありますが、翁は東京に来られる度に私を呼んで「日本橋のすしを食べて見ろ」「学費は十分か」「家族を呼び寄せてはどうか」と溢るる慈愛のお話をいただきました。そして翁のポケットマネーが私の臨時収入になったり、家族と東京での生活が出来るようになったのであります。勿論生活費一切は翁の心配によるものです。私事に亘って恐縮ですが翁と私との関係は単に理事長と教師というだけではなく、筆舌以上の恩顧を受けて居ります。(中略)そのために殊更に翁を祭り上げてという考えは毛頭ありません。そんなことをすれば翁に叱られることを百も承知して居ります。唯こうした関係を抜きにしてはベンを進めることは出来ませんので、この程度のことはお赦しいただきたいと思えます。

前述の通り翁にはいろいろお世話になりました。然し世の中には世話をする人も数多く居る

と思いますけれども「生きる張り」を与える人は幾人あることか……です。

(後略)

昭和八年に岩中に着任した牟岐は、二一年まで在職し、本校の発展期を献身的に支えた。その漢学に対する深い造詣と不拔の信念に裏づけられた厳格さには定評があり、岩中を去った後も、県内の高校の教頭や校長を歴任したほか、県教育委員としても活躍した。

平成六年一二月、逝去。享年九四歳。

## 鈴木校長就任す

義正翁が学校開設にあたってもつとも苦勞したのは校長の人選だった。自分の精神を体現し、校風の基礎をつくる初代校長には、是非とも大人物をとという切なる願いがあつた。候補にあげられたのは鈴木卓苗であつた。鈴木は人格者であり、学識経験ともに卓越した天性の教育者だった。

鈴木卓苗は花巻の在に生まれ、盛岡中学から旧制二高、東京帝国大学に進んだ。この間、義正翁の主宰する岩手育英会から第一回の貸費生として奨学金を受けていることはすでに書いたとおりである。帝大卒業後は教職に就き、全国

の学校を転々としていた。

岩中初代校長の候補にあがった当時、鈴木は栃木女子師範学校校長として令名が高く、仙台の女子専門学校でも校長に迎えようという動きがあつた。その鈴木に、義正翁の意を受けてまづ鏡保之助が書面を送った。ついで関壮二が訪ね、富田小一郎が訪ねた。私立盲啞学校を営んでいた鈴木は学友・柴内魁三からも手紙が行つた。いずれも郷里の子弟のためにぜひ来校してほしいとの勧誘である。

鈴木はいろいろ迷い、いったんは辞退しようと考えたが、公立の窮屈な機械的教育にあきたらずにいたこともあり、私学であれば生徒それぞれの個性を伸ばす自由な教育を施すこともできるだろうと、その就任を決意した。もちろん、岩手育英会の第一回貸費生として奨学金を受けた恩に報いる絶好の機会だと考えたからでもある。

四月一七日、鈴木は宇都宮からまっすぐ盛岡入りし、三田邸を訪ねた。そのとき、義正翁の「県下教育の為に一異彩を点せんとするの素志あり」の言葉に非常な感銘を受けたという。

鈴木卓苗の岩手中学校校長への正式な就任は、前任校の退官事務が遅れたため六月八日となつた。六月一七日に執り行なわれた就任式で、鈴木校長は校風の基礎についてこう訓示した。

「私は本校に於いて学園主義の教育を施そうと



思っているが、しからは学園主義とは何ぞや。従来教師はただ学科の注入に忙しく、試験という一定の尺度を以て生徒の知識を試験し、その標準に合致させることをつとむるのである。こういう方針は生徒の個性を無視し、その活動気分を抑制すること甚だしいものである。それで私は諸子を植物の幼芽と看做し、職員は園丁として之に臨み、害虫を駆除し肥料を施しその天分の発達を企画しているものである。諸子はこの学校の意図に信頼し最善の努力を致されたい。殊に諸子は第一回生として自ら校風の樹立に当たるものなれば一層責任の重大なることを感得しなければならぬ。

## 伝統の形成着々と

学校の象徴である校旗や校歌が制定されたのは、昭和二年から三年にかけてである。

校旗は三田義正理事長より昭和二年九月二日に寄贈された。その図案の由来は次のようなものである。

「岩」ノ古字「巖」ノ上ニ「中」ヲ重ネ桜花ニテ包シモノ、以テ「岩中」ヲ表スト共ニ、当市ノ名勝「石割桜」ヲ暗示シ、精神一到何事不

成ノ信念ヲ表象セルモノナリ。

「校旗由来書」より

また校旗下隅の「岩手中学校」の記名は、岩手奨学会理事で海軍大将の柄内曾次郎の筆になるものであった。

校旗制定式から三日後の九月五日に岩手山頂で校旗樹立式が行なわれた。その日、鈴木校長以下職員生徒二〇〇余名は校旗の略旗を押し立てて岩手山登山を敢行し、山頂に校旗を樹立、万歳三唱して校運の隆昌を祈った。また校長は奥宮前で「校旗樹立之辞」と題する祈願文を奉読した。結びの一節を掲げよう。

冀はくは

岩手山々霊の冥祐を仰ぎ我校の文運は日に月に隆昌して其業績は以て永く国家民人に貢献する所あらむ、

又庶幾くは我校の堅実雄偉なること岩手山の如くあらむことを、

つ、しみ

かしこみ

我等が祈願をのぶ、

この日、あいにくの風雨に襲われながらも一行の志気は高く、「記念標」を建てて下山した。標文は「皇風永扇校運隆昌」というもので、これが二年後に同地に建立された校旗樹立記念碑

の碑石に刻まれることになるのである。

昭和三年一月二日、かねて依頼していた校歌の歌詞が土井晩翠から送られてきた。申し分のない出来ばえで、鈴木校長はよほど気に入ったものとみえ、さっそく筆をとって校歌全節を日記帳に書きうつしている。

曲の完成は同年一月二三日、山田耕筰の手になった。生徒に歌わせてみるとじつに雄麗軽快な曲調であった。ただ四番の出だしの歌詞がやや曲になじまないもので、鈴木校長みずから手を加えて現在のものに直したという。晩翠作では「無言のさとし空を衝く 岩手の山の七千尺 北上川の八十里」であったのを、鈴木校長は「無言のさとし朝夕に 七千尺の岩手山 北上川の八十里」としたのである。

また、創立時に制定された校規三大綱領（三綱）の「積慶」「重暉」「養正」は「日本書紀」の神武東征のくだりが出典である。さらに言えば、『日本書紀』よりおよそ二五〇年前に編纂された中国の史書『後漢書』にも用例がみられる。鈴木校長は朝礼訓話の際、幾度となくこの三綱について語った。

「私は本校校歌を作成する時に、作者の土井先生に、本校校風の三大綱領たる重暉と積慶と養正の三つをその中に読込むように申入れたら、先生は詩人であるから、之を取直して神と祖国と人道の三つに言い替えられた次第である。即

ち重暉は朝日の輝きであって、神の威徳の表徴であり、積慶は我が国歴代聖徳の余沢であって、之によって皇室と国民との繁栄を意味し、養正の正は正義の正に当り、世界人道の根底を為すところのものである。

この三つの語は本校校風の三大綱領を寓するものなることを省察し、大にこの精神を發揚されたい」(昭和四年六月一三日の朝礼訓話より)

このようにして、草創期の本校に優れた校風や伝統が着々と形づくられていったのだった。

# 積慶 重暉 養正

卓苗書

鈴木卓苗校長揮毫(昭和7年)

## 学園主義の実践

鈴木校長の出勤の姿はいつぶう変わっていた。ボタンではなくホックでかける学習院式の詰襟服に、岩中の帽章が輝く黒いワツパ帽。それでいて少しも珍妙にうつらず、温容のなかにも威厳があった。

鈴木校長は朝礼を重視した。「太陽の照らぬ日はあつても朝訓(朝礼訓話)のない日はない」

と言われたほどである。けっして能弁ではないが、「太空」と号する仏教家でもあった鈴木校長の話題は豊富だった。その人間味に溢れる訓話は生徒ばかりでなく教師にも耳を傾けさせる説得力を持っていた。鈴木校長の朝礼訓話は漢文の山田仁三郎教師が立ったままで速記し、のちに「朝訓抄」としてまとめられている。

鈴木校長が唱えた学園主義は、具体的にはさまざまな行事を通じて実践されていた。

週一回の体育デー、月一回の遠足・修身講話・勤労デー。その他にも岩手山登山、マラソン会、



岩手山頂校旗樹立記念碑(昭和4年9月11日)

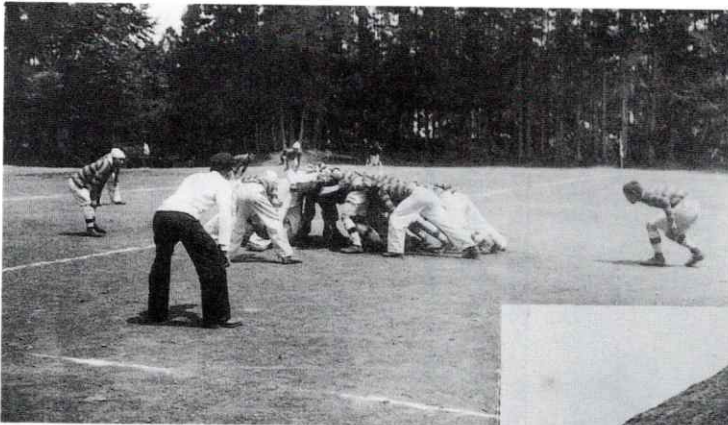


クロスカントリー、枝豆会、ぶどう会、茶礼会、寒稽古、その最終日の鏡開きなど、ほとんど一年じゅう行事続きと言ってもよかった。教室内の限られた接触だけではなく、教師と生徒、生徒と生徒が全人的に触れ合える課外授業を重視したのである。鈴木校長自身、つねに生徒とともにあるという気持ちから、勤労デーの大掃除ではみずから率先して便所掃除に精を出したという。

遠足には近郊のいたるところに出掛けた。たとえば雫石、鶯宿、大志田、深沢山、大萱生、志波城址、姫神などである。ときには汽車で平泉にも足をのびした。春にはわらび採り、冬には雪中行軍のあと兎狩りも行なわれた。

行事がある度に、みんなで会食した。入学式の当日に、講堂でみんな一緒にだんごを食べたこともある。納豆餅の味を、寒稽古最終日の鏡開きで知った生徒も多い。みんなで食べる豚汁の味は格別だった。鈴木校長は「人間は食べてる時には人を陥れようなどとは考えないものだ」とよく生徒に話した。

昭和四年六月には蛇の島の三田農場内に「岩手中学勤労園」が設置され、毎月の勤労デーには全員または半数の生徒が出動した。歩くだけで往復二時間以上はかかった。鋏は各組五丁で作業は交替でやることになる。手慣れていない中学生の植えつけだから、馬鈴薯も枝豆も大した出来ではなかったらしい。薯の出来は中位、



岩手公園でのラグビーの練習（昭和7年）



蛇の島三田農場内の勤労園（昭和4年）

一三〇貫ほどの収量であった。これは野食会の汁の実となり、枝豆は枝豆会と称する試食会で食した。まだ施設も成績も充分ではなかったが、この岩手中学勤労園は昭和五年の「岩手日報」文化賞を受けている。

週一回の体育デーには、放課後に全校生徒ひとり残らずスポーツに参加した。種目は柔道、剣道、バレー、テニスなどであったが、各自でも好きなものをやればよかった。校庭いっぱいにはネットを張り、校長も運動服を着てラケットを握った。とかく先生や先輩という存在は怖くて近寄りたいた時代だったにもかかわらず、スポーツを共にするおかげで、岩手中学では教師と生徒、上級生と下級生が互いに親しみ合っていた。

ところで、本校の生徒会組織である石桜会が結成されたのは大正一五年七月であるが、その活動が本格化したのは各学年が揃いだす昭和三、四年ごろからである。石桜会所属の各部を列挙すれば、総務部、修養部（名士の講演会などを企画・開催する）、正語会（弁論部の前身）、剣道部、柔道部、競技部、庭球部、水泳部、遠足登山部、自彊術部（自彊術とは、関節の伸縮や皮膚の摩擦などによって気力・体力を高める術）、蹴球部、会誌部、英語会、写真部、音楽部、販売部であった。

さらに、若い体育教師・広嶋英雄が本校にもたらしたものにラグビーがあり、昭和二年四月

に岩手公園グラウンドでラグビー部発会式をあげている。以後、春秋二季にクラス対抗の試合などをやって実力をつけ、昭和四年一月、盛岡中学を相手に行なった対外試合で初陣ながら一五対三と大勝、早くも校技ラグビーの伝統を打ち立てたのである。

## 新渡戸稲造博士 来校す

草創期の本校における忘れられない出来事のひとつに、新渡戸稲造博士の来校講演がある。

昭和二年一〇月五日のその講演を、当時の二年生角尾吉美は自発的に記録した。その貴重な速記録から、ハイライトの部分抄録する。演題は「先駆の精神に就いて（パイオニア・スピリット）」である。

私は一一年振りでこの盛岡へ来て、種々市街の様子などを見てその変化に驚いたが、殊に興味を喚起したのは、三田義正氏が私財を投じて岩手中学校を設立した事である。それで今日は、私から進んで先生方や諸君に逢い、お話をしたいと思った次第であるが、時間が乏しいので機会を見て再会を期し、様々なお話も承り、所見をも披瀝したいと思うのであります。

今回は墓参のため来たので明日直ちに三本木

にむかわなければならぬし、今日もこれから前約の所にも参らなければならぬから僅少の時間で私が思う事の一部を申し述べるのであります。何でも物を始めると言う事は所謂創業難で容易なものではない。殊に邦人は人のすることを好意で見ない。彼は売名の為にするのだらう。彼は別に利する所あつて目論んだであらう。と言うように何事でも常に嘲笑、罵りをもって迎える悪いくせがあるので、誰も心から力を尽くして金銭をなげうって仕事に取り掛からないのである。それを、三田氏が百難を排してこの事業を創成した事は、その人格に偉い所、床しい所があるのである。

諸君は！歴史も沿革もない、白紙のような新設の学校を双肩に背負って立つのであるから、校風の樹立については責任も重いかわり、極めて愉快な意味があるのである。

よろしくパイオニア・スピリット、即ち先駆の精神で立つて行かれない。

自分の信ずるところは千万人といえども吾行かんの意気で進みたいのである。「右顧左眄」は甚だ生氣のない仕事だと思ふのである。

私は外国に居ると右の頭が痛み、本国に帰ると左の方が重い感じがするのである。それは外国に居ると紳士としての作法、少しでも公德に背くような事があつては自分一人の為でなく邦人全体に関することなどを思い右の頭が痛くなり、国へ帰ると気兼ねや取越苦勞が多いので左



の方の頭が重くなるのである。

諸君は、新しい学校の創業をして行くには、下らぬ他人の毀誉に頓着せず、一大新機軸を押し出して立たなければならぬ。

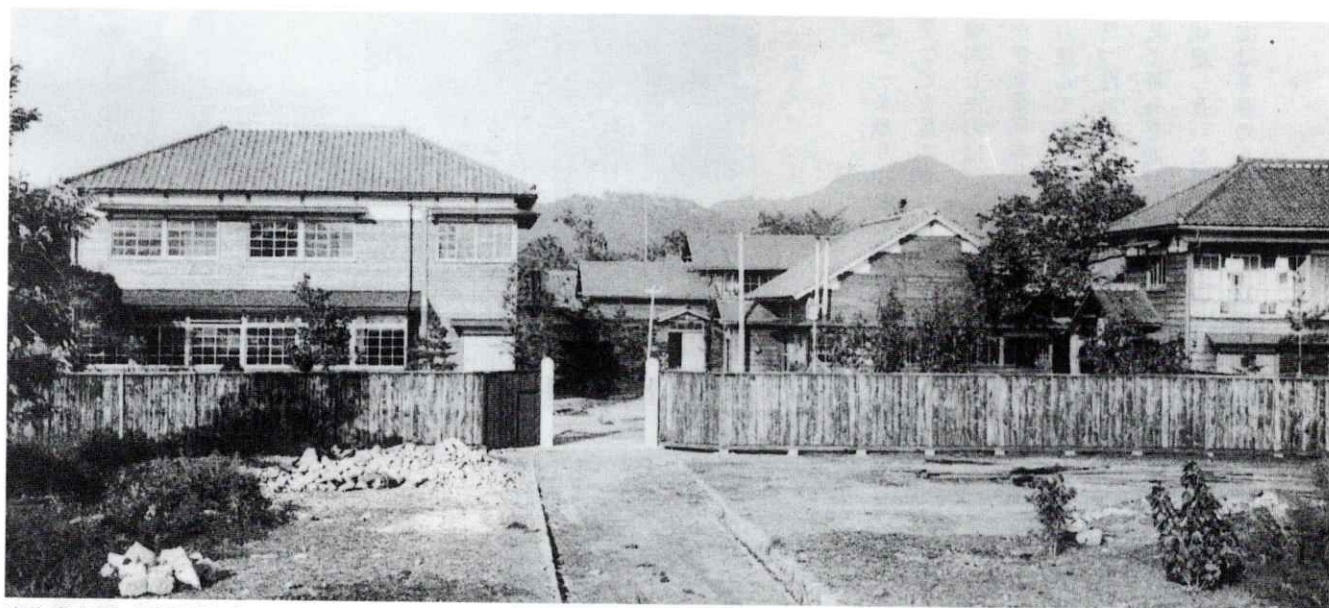
外国では、独、英、仏、皆このパイオニア・スピリットを尊び、米国は特に然りである。イタリヤなどには保守的などころがあるといえようが、西欧諸国一般の風潮は、皆、この先駆の精神を尊ぶのである。(中略)

私は頻りに諸君にパイオニア・スピリットを推奨するが、トラディションな因習とか伝統とかいう精神は、愛国心とか大和魂とかいう精神の涵養などに必要な事ではあるが、之に抱われてはいかぬということである。

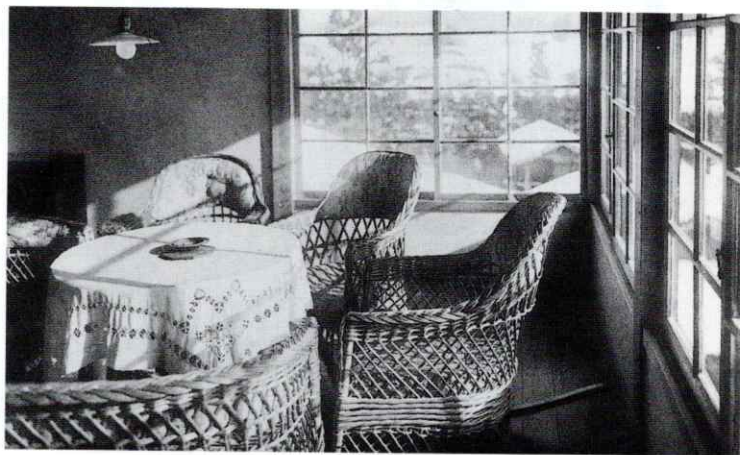
聖人の教えにも「温故知新」ということがあるが、「温故」だけではこの世界文化の進運に伴うことは出来ぬのである。

昔、ナポレオン一世は、ある制度を設ける必要から、国の重臣を集め会議を開いたとき、その重臣の人々は、皆、古い因習や仕来りを述べると、皇帝は声に応じて、アイ・アム・アン・アンセストア、訳すると「私は祖先である」といった事は有名な話である。

諸君は、国家のため、母校のため、このパイオニア・スピリットを奮起し、新たな校風の創成に先駆をつけられたいのである。この精神で努力していった結果は、十年二十年の後に、お互いに思いあたることがあると思うのである。



寄宿舎全景 (昭和12年)



面会父兄のための寄宿舎応接室  
(昭和12年)